

僕と、先生と、先生のお母さん

授業参観に、お母さんが来た。先生の。

「浅田和子って言いますう、いつも健人（けんと）がお世話になっております」

「ちよつと母さん。そろそろ保護者の皆さん入って来られるから。静かに」

僕は窓際の最後列の席から後ろを振り返り、和子さんに群がるみんなを眺めていた。
「はいみんなも、そろそろ五分前になるから席ついて」

先生の一言で、みんながその活気を残したまま自分の席へと移動し始める。やがて一人残った和子さんは、柔らかな表情を見せながら僕の座る窓際へと近づいてきた。

「こ、こんにちは」

自然と目が合い、とっさに挨拶をする。

「どうも」

「あれ黒板消してないじゃん。今日の日直って暁良（あきら）くんだったけ？」

「あ、はい、そうです」

和子さんの返事を聞き終える間もなく浅田先生に呼ばれた僕は、すぐに席を立って

教卓の方へと向かった。

河野暁良が教卓へ向かう中、生徒たちは教科書などを机の上に出し始めた。授業開始五分前を告げるチャイムが教室をより一層騒がしくする。

「なんで先生のお母さんまで観に来たんですか？」

日直として黒板を消しながら、暁良が尋ねた。最前列に座る生徒たちも共感したように大きくうなずく。先生の浅田健人はチョークを整理しながら「さあ、何でだろうね」とだけ軽く答えた。自分の母親について話すことが恥ずかしいというのもあったがそんなことよりもっと根本的に、健人自身もなぜ母親が来たのか分かっていなかったからだ。

自然に囲まれたこの小さな中学校に健人が赴任してきたのは昨年度。三年間クラス替えないこの学校で、彼が人生初の担任となったのがこのクラスだった。それから一年が経ち、二年生となっても生徒たちは引き続き健人と時を共にし、そしてそんな今年度もあと三か月で終わりを迎えようとしている。今日は二年生として最後の授業参観日。そんな日に突然、母親はやって来た。

「え、え。……え、なんで来ちゃったの」

保護者が授業を観に来る五時間目の前の、昼休み。職員室に向かって昇降口付近を歩いていたら、数名の保護者に交じって一際年老いた女性が校舎に入ってくるのを見た健人はすぐさま彼女に迫り、その声をかけた。

「健人が今日は参観日だと言っていたからね、じゃあ私も行こう、と」

「理由になってないって」

普段は遠い田舎町で暮らしている両親だが、正月に健人の家で行われた親戚の集まり以降はしばらくそのまま彼の家で生活を送ることになっていた。

「父さんは家にいるの？」

「学校まで歩くのが嫌だと言ってうもんだから、置いてきたわよ」

「うーん、まあ分かった。えっと二年一組だから。あの階段上ってすぐの教室。まだ授業始まるまで時間あるから、静かに廊下で待ってて」

先生にとつての授業参観など聞いたことがなかったが、わざわざ家から歩いて来た母親を帰すわけにもいかず、健人はぶつぶつ文句を言いながら職員室に向かった。

教材を持って階段を上ると廊下に母親はおらず、教室からのにぎやかな声だけが廊

下に響いている。不安を感じたまま扉を開けると、案の定母親が生徒たちに囲まれて嬉しそうにしていた。チャイムが授業開始五分前を告げる。いつも通りの授業ができる気は到底しなかったが、いつも通りの授業をする以外に選択肢はなかった。

「さて、日本の周りには四つの海流があると前回授業でやりましたが、じゃあ、暁良くん」

生徒の保護者たちが多くいるおかげで窓際に立つ母親のことは案外気にならず、健人は淡々と社会科の授業を進めることができていた。黒板に貼った日本地図の横に書かれている日直当番の名前を呼ぶ。小さな返事とともに立ち上がった暁良の方を向くと、必然的に母親の穏やかな表情が視界に入ってきた。

「はい、えーとじゃあ、ここを流れる海流は何て言いましたか？」

健人は再び母親のことが気になり始めてきたが気を取り直し、持っていた指し棒を地図上に当てた。

「……………」

教室にこれ以上ないほどの沈黙が流れる。棒の先を見ていた健人が振り返ると、暁

良は「えー……」と口を動かしながら軽くうつむいていた。そしてその横には……

「あつ」

思わず声が漏れる。暁良の横で、母親が顔を一変させて健人を鋭く睨みつけていたのだ。眉間に寄ったそのしわの意味を、健人は一瞬で理解した。

「こ、これは難しいかな、うん。えーと、これはね、これは千島海流ですね、はい」
あつさりと答えを教えた健人。母親が真顔で頷くのを見て、これで良かったようにだとほっと一息つく。しかしこのままだと何となく暁良が可哀そうだったので、健人は続けて別の質問をした。

「暁良くんちなみに、この千島海流はもう一つ呼び方があるんですけど、それは『なに潮』だったかな。お、お……?」

必死で口を「お」の形にする。

「親潮?」

「はいっ正解ですね。親潮、と呼ばれますね」

顔の緊張がほぐれ、安心した様子で席に座った暁良を目の前にして、保護者たちも少し笑顔を浮かべた。椅子を机に寄せた暁良は短い赤鉛筆をノートの上に走らせてい

る。健人は授業を進めつつ、壁に沿って並ぶ保護者らの中に暁良のお母さんを探した。一通り見渡すがその姿はなく、やはり今日も来てないか、と心の中で呟く。薄く積もった雪を滑る冬の風が、閉ざされた教室の窓を静かに震わせていた。

2

「はいじゃあ暁良くん。挨拶お願い」

「起立。さようならー」

僕の声に続いて、みんなが帰りの挨拶をする。ぞろぞろと教室を出ていくみんなの波に乗ろうとカバンを手にとったその瞬間、香（かおる）が僕に声をかけてきた。

「暁良ー。今日は部活来るー？」

窓際の最後列に座る僕に対して、香の席は廊下側の最後列。カバンを背負いながら右を向くと、香は表情を緩めながら立ってこちらを見ていた。

「ごめん、今日も早めに帰んなきゃいけないくて」

お決まりの台詞を口にし、軽く頭を下げる。香もそう返事が来ることは薄々分かっ

ていたようで、「分かった」とだけ言って椅子に腰を下ろした。正月休み前からこのやり取りはずっと続いている。そしてその際に僕が返す言葉は全て「行かない」なのだ。それでも彼は毎日同じテンションで「今日は部活に来るか」を問いかけてくるのだ。正直、うっとうしく感じる日も多い。でも、そもそも僕が部活を辞めたことを他の部員に伝えていないことが、このやり取りが起きている一番の原因だ。そのため僕が香に文句を言うことはできない。そして今日も僕は、部活に行かない。

混雑する廊下を抜けて下駄箱の近くまで来たところで、突然同じクラスの女子五人ほどが、勢いよく僕を抜かし下駄箱を走り抜けていった。何か分からずとりあえず駆け足でその後を追う。

「また来てくださいね！」

昇降口一帯に、女子たちの明るい声が響いた。玄関の扉を少し抜けた先に、彼女らともう一人、しゃがんで靴紐を結ぶ人がある。やがてこちらを振り向いたその人物は、浅田先生のお母さんだった。

「まあーさっきの子たちじゃないの。わざわざ見送りに来てくれたのかい」

思えば五時間目が終わった直後、先生のお母さんはまた大勢の生徒に囲まれ、あれこれ質問を受けていた。そのまま何とか帰りの会まで終わらせた浅田先生だったが、あの時の困ったような、恥ずかしいような先生の表情は今も頭に浮かんでくる。

「正月からここに来てるんですね！ 雪凄くなかったですか？」

「そうねえ。私の住んでいるところも降るけど、ここほどではないわねえ」

会話を聞き流しながら僕は一人、順調に靴を履き替え、少し重たい扉を開けた。最後にもう一度、チラッと和子さんに目をやる。堂々とした立ち姿。浅田先生はまだ二十代なので僕のお婆ちゃん……とまではいえないが、でもいかにも先生のお母さん、といった見た目である。灰色のカーディガンが細めの体にフィットしている。これだったら今日は、隣町に住む僕のお婆ちゃんに来てもらえばよかった。どうせ母さんが来られないのなら、そうした方がマシだった。駐車場を覗けば、一緒に車へ向かう親子数組の姿が目に入る。思わずついたため息が、雪の残る風景をよりいっそう白くした。

古いアパートの階段を二階まで上り、固く錆びついた扉を開ける。外の廊下を照らす電球がほとんど機能していないせいで、部屋の中が異様に眩しく感じた。

「ただいま」

「おかえり暁良。そろそろご飯作り始めるからね」

ちょうど奥の部屋から出てきた母さんはそう言うのと、乾いた服の入ったかごとともに違う部屋へと足早に消えていった。

「先に、二人で食べ始めていいよ」

「今日も？」

その問いかけを聞いて、昨日も帰ってきてから同じように言ったことを思い出した。

「いや、きよ、今日給食いっぱい食べて、全然お腹空いてないから」

「そんなこと言って、本当は早くゲームがしたいだけでしょ」

大正解の言葉が玄関まで響いてくる。僕は何も言わずに、玄関を越えてすぐ横にある自分の部屋へと入った。靴下を脱ぎ、カバンと一緒に床に投げる。

「今日拓実（たくみ）がね、学校で書いた絵を持ち帰ってきたのよ」

壁を一枚挟んだ向こうの部屋は母さんの部屋。母さんはよくそこでアイロンをかけたらしながらこの部屋に向けて話しかけてくる。弟の拓実は小学二年生。少年野球チームに所属しているなど、僕とは正反対の趣味を持っている。本来この部屋は僕と拓実、二人の部屋なのだが、拓実はいつもリビングでテレビを眺めているため、実質僕だけの部屋みたいなものだ。おかげで毎日、心置きなくゲームができています。

「秋の紅葉風景でさ。たくさん色使っていて、凄く綺麗だった」

母さんの話を無視していたことにふと気づき、慌てて「ふーん」と相槌だけ打っておいた。

「やっぱりずっと暁良の絵を見てきているから拓実も、暁良みたいなのを描きたい、っ
て思ってるんだよきつと」

「はあ」

「お母さーん！ お腹空いたあー！」

僕が空っぽな返事をした瞬間、さらに奥のリビングから拓実の荒っぽい声が聞こえてきた。

「分かった、分かったよー、拓実。今作り始めるからねー」
明るく返事をしているが、それが多少の無理をすることであることは僕にでも分かる。しかしだからといって何か僕がすべきことも無い。真つすぐ机に向って、パソコンを起動させる。壁に掛かったヘッドホンを耳に当てた途端、僕は一人、違う世界の中へと入り込んでいった。

4

また雪が降っている翌朝、朝のホームルームが始まる直前に教室の扉を開けると、その中にはいつにも増してうるさかった。どうやら昨日、あの後も女子たちは玄関前で和子さんと話を続けていたらしく、その話題で盛り上がっているようだ。

「和子さんの旦那さんも、先生やってるんだって！」

「え？　じゃあ親子そろって先生ってこと？　知らなかったあー！」

僕も知らなかった。というか知らないのが当然である。

「はい席ついてー」

いつの間にか鳴っていたチャイムの音とともに、浅田先生はいつも通り落ち着いた様子で教卓に現れた。みんなに合わせて僕も速やかに自席へと移動する。

「えーと昨日は、お騒がせしました」

まだ静かになっていないタイミングで、先生は早速頭を下げた。あちこちで笑いが起きる。

「和子さん昨日、明日も行くのかなとか言っていましたよ」

一人の女子が声を張った。

「そうなんだよ。でも今日は参観日ですらないからさ。母親には絶対来ないでくれって言うてきたよ」

「えええー」

みんながわざとらしい反応を見せる。僕は先生のお母さんが来たとして別に聞きたいことなどはないが、みんなが残念がる気持ちも分からなくはない。

「まあいいや、とりあえず挨拶しましょう。日直お願いー」

先生がさらっと話を切り替え、教室には椅子を引きずる音が存分に響き渡った。

「さて、最後に……」

引き続き朝のホームルーム。いくつかの連絡を終え、先生はおもむろに教卓の中から一枚の紙を取り出した。

「えー、河野暁良くん」

「……ん？ あ、はい」

突然の呼び声に、分かりやすく戸惑ってしまった。

「前に来てください」

みんなが一気に後ろを振り返る。僕は椅子を後ろに引きながら、この段階で何が手渡されるのかは見当がついた。賞状だ。この流れは毎回賞状が手渡される流れだ。

「では、読み上げます。賞状、優秀賞。河野暁良殿」

やっぱり。

「あなたは第二十五回全国中学生美術コンクールにおいて……」

やけに改まって読み上げる先生の前に立ち、僕も自然と背すじが伸びる。たしかこのコンクールは、美術の授業で制作した作品を二学年全員が応募したものだ。昨年度の終わりから描き始めた風景画で、今年度の春までが提出期限だった。僕は中庭の花

壇を描いたのだが、そうか、あれが入選したのか。

「……おめでとう！」

ぼーっと考えていたうちに読み終えたようで、教室は拍手に包まれた。軽く頭を下げて、両手で賞状を受け取る。

「えーとじゃあこれで終わりまーす。日直」

「起立」

椅子に座る間もなくみんなが立ち始めたので、とりあえず賞状は机の上に置いた。
「ありがとうございますましたあー」

一時間目の用意をしていると、香が僕の元にやって来た。

「暁良やつぱすげえなあ。また賞取ったな、何回目だよ」

「うん、ありがとう。でも香も、美術部の方で賞取ったじゃんか」

「それは今回、暁良が応募しなかったからだよ」

応募しなかったと言うよりも、作品を完成させなかった、と言う方がきつと正しい。僕は言い慣れていない様子を全面に出しながらも、

「た、たしかにそれはあるかもしれない」と冗談を言い、笑ってみせた。

5

……完全に忘れていた。

「まあねー、悪くはないんだけど……」

僕の成績表を眺めながら浅田先生が呟く。記されているのは、正月休みが開けて早々に行われた定期テストの成績である。

「晧良くんならもつとできていいと思うんだよね」

クラスでごちそうさまを言った直後、名簿順に学年室まで来るよう先生から告げられた。テスト自体はそれぞれの授業で返却されたので点数は既に分かっているが、問題は成績表の中身ではなく、その際に行われる担任との短い面談だ。中三への進級が近づくにつれ、先生たちが「勉強、勉強」と口にすることも増えてきている。例年ある程度進学実績のある中学校なので仕方ないといえれば仕方ないが、一対一でその類の

ことを言われるのはやはり気持ちのいいことではない。

「数学はガクンと点数落ちちゃってるし……」

それが今日の昼休みに行われることを忘れていたのは僕だけではなかったようで、給食後はみんなしてブツブツと文句を言いあっていた。

「正月とか、ダラダラしちゃったか？」

そして今、予定通りに先生との面談は進んでいる。

「いや、別に……勉強はしましたけど」

あえて適当にそう答えた。事実、休み中はほとんどゲームに時間を費やしていたが、ダラダラと勉強をサボっていたのはまた何か違う気がする。

「進路もまだ決まっていないようだけど、早く決めて勉強していかないと。晁良くんならもつと上目指せるんだから」

前回のテスト後もこんなことを言われたような気がする。浅田先生は少し焦っているようだが、ここで今すぐ進路を決めるわけにはいかないのです、僕はとりあえず「はい」とだけ返して面談を終えた。

小さな成績表を片手に持って教室へ戻ると、数人の男子たちが後方の一か所に集っていた。また先生のお母さんでも来たのかと思ったがどうやら違うようだ。

「はい返して返して！」

集団の中心で一際騒いでいたのは、翔太だった。周りの男子が翔太の成績表を順に見て回している。

「晧良も見ろよ、ほら」

お、おう。

「ちよつともういいでしょ」

僕の手に移った成績表を取り戻そうと手を伸ばしてきた翔太に対し、僕はくるっと背を向けてそのままその紙を眺めた。

「え、また学年一位取ったの？」

思わず出た僕の大声を耳にしたクラスメートたちが、さらにぞろぞろと集まってくる。

「ちよつと晧良くん！」

「いやごめんごめん。え、これで……？」

「八回連続一位」

香が冷静にそう言った。周りのみんなが小さくどよめく。

「ま、まあ。うん」

なんとも気まずそうな表情で、翔太はゆっくりと僕の手から紙を抜き取った。

6

「暁良ー。今日は部活来るか？」

「ごめん今日も行けないわ」

「あいよー」

これほど毎回同じテンションでやり取りが出来ているというのも奇妙なものだな。

足早に校舎の外へと出た僕は、すぐ脇にある水道の前に荷物を下ろした。今日は翔太と一緒に帰ることになっているのだ。

家が近い僕と翔太は小学校以来の友達で、時間が合う時はいつも一緒に下校をして

いる。僕が美術部に入っていた頃、翔太は毎日放課後は図書館へ行き、部活動の代わりに勉強をしていた。そして僕が半年前に美術部を辞めてからはそのスタイルを変えて、僕と同じく早めに帰宅をして家で勉強に励んでいる。学年一位という肩書きが物語っている通り、彼は誰よりも勉強に熱心だ。部活に入っていないのもそのためだろう。

「お待ちせー」

「お、早っ」

教室から忘れ物を取ってきた翔太が、かかとを靴に押し込みながら近づいてくる。

「何取りに行ってたの」

「成績表」

翔太がそう言って右手を上げると、みんなに散々揉まれてしわくちやになった成績表が僕の視界に入ってきた。

「……なんか、ごめん」

「晧良くんが叫んでから、七、八人は群れに加わったかな」

翔太が口元を緩めながら、くいつと黒縁のメガネを上にも動かす。雪道の上に散らば

るいくつかの足跡をたどって、僕たちは学校を後にした。

7

街を見下ろす山々が温かさを帯び、冬の青白かった表情を変え始めている。風の温度も確実に夏へと近づき始めているが、半袖になるのはさすがにまだ早かった。時々襲う身震いに文句を言いながら通学路を行く。そんな五月の半ば。とうとう受験生となってしまった僕が最も迎えたくない日は、もう明日に迫っていた。

「三者面談が始まります！」

そんなに張り切って言わなくてもいいのに。

「進路がまだ定まらない生徒も多くいますが、三年生になり、もう志望校を意識していく時期です。しっかり前もって親御さんと話して、面談に臨んでください」

真面目に進路の話をしているときの浅田先生は、どうも好きになれない。その原因はただ僕が進路について考えたくないだけであり、先生の問題ではないことは分かっている。しかし先生には申し訳ないが、決めたくないものは決めたくないのだ。

その日の帰り道。翔太は唐突に尋ねてきた。

「晧良くんは、高校行っても絵描くの？」

「……ん？」

「いや、明日から面談始まるから、晧良くんはどんなのかなあって。小学校からずっと絵描いてるじゃんか」

翔太にさえも、僕が去年美術部を辞めたことは伝えていない。嘘の退部理由が思いつかなかったからだ。だから同じ美術部の香とは毎日同じ掛け合いをしているし、翔太には学校ではなく家で美術部の活動していると言っている。

「うーん……」

「まだ迷ってる感じ？」

「ご、ごめんあの、し、進路の話、やめない？」

「え？ ……あ、うん、分かった」

多分翔太は何も分かかっていないだろうが、何かがあることは察したようですぐに聞き入れてくれた。

「今日ね、体育の授業で……」

そしてすぐさま別の話題を切り出してもくれる翔太の優しさを改めて感じながらも、実は頭の中ではまだ進路のことを浮かべていた。

進路に関しては、僕と翔太は真逆だ。翔太は僕が出会った当初から夢を持っていた。医者になりたい、という夢を。きっかけは昔の出来事の中にあつたらしいが、そこまですくは話してくれなかった。家族のこともあまり知らない。でも翔太の親がどちらも医者でないことは知っている。

翔太が誰よりも勉強に時間を割いているのもきつとその夢を実現するためだ。塾などには行かず、図書室や家で日々黙々とペンを走らせている。ついこの間十回目の学年一位を記録した際も、一応喜びながらも納得はしていない様子だった。彼の基準はもっと高い位置にあるのだろう。親も喜んでるんだろうなあ、こんなに頑張っていたら。僕もこれくらいやれば母さんは喜ぶのかなあ、どうだろう。

やっぱり、すっかり勉強はしなきゃいけないのかなあ。

「いただきます！す！」

拓実のまっすぐで元気な声さえも、今日に限っては僕のどんよりとした気分を晴らしてくれなかった。

「今日席替えがあつて、俺は誰の隣になつたでしょう！」

「えー誰だろう？ 私も知ってる人？」

「多分知ってる！」

さすがに何日も連続して一人でご飯を食べるのは申し訳ないと思い、今日はゲームを中断してみんなで食べることにした。と言っても僕から話し始めることはほとんどなく、拓実が無邪気に話すのに母さんが加わるのが大体の流れだ。

ご飯を食べることと二人の会話に耳を傾けることに最小限の意識を向けていると、今朝浅田先生が放った言葉が脳内で再生される。

「しつかり前もつて親御さんと話して、面談に臨んでください」

親子で事前に相談をしておくべきなのは重々分かっている。ましてや僕の場合は特

に……

「そうだ、暁良ごめん、明日また仕事が入って面談行けなくなっちゃった。先生によろしく伝えといてくれる？ ごめんね本当」

もう二回目なので慣れた。三者がそろわない三者面談。親が来ないのならばなおさら家で話し合っておく必要があるだろう。しかし僕が「分かった」と一言返したきり、その話題が食卓で上がることはもうなかった。

「で、暁良。進路はどうするの」

お風呂から上がり、明日の用意を始めたところで母さんの声が壁の向こう側から届いてきた。

「明日先生に聞かれるんじゃないの？」

机の上に置かれた教科書を取るために伸ばした手を一度止めて、「まあ、うん」とだけ答える。

「前チラツと言ってた高校目指すなら、勉強もしなきゃいけないでしょう？」

「まあ」

「デッサンの試験もあるって言ってたじゃない」

「うん」

「このままゲームばかりし続けたら」

「いや別にゲームし続けるつもりは」

「もう三年生になったんだしさ」

「……………」

「しっかりと目指すならお母さんだって……………」

「目指したくても目指せないんだよ！」

我慢できず一人、部屋の中で床に向かって叫んだ。

9

面談が始まるまで、部活などの無い生徒は学習室で待機する。僕は今日の三番手。真面目に勉強でもして待つことにしようかな。

「起立。さようなら」

みんなが出ていく中、僕はなかなか立ち上がる気になれずに座ったままでいた。面談で何を言うかはほぼ決まっているのに、どうしても変な緊張感が身体から抜けない。結局まだまだ、親のいない面談に慣れていないということなのだろうか。それとも昨晚の……いや、思い出すだけでも苦しくなる。いいんだ、気にしなくて。嫌な過去はすぐに忘れる、いつもやっていることだ。だから気にするな。気にするな……

「暁良ー、今日は部活」

「行かないよ！」

「えっ」

香に対し、思わず声を荒げてしまった。頭に浮かんだ言葉を心にとどめようとしたが、もう遅い。

「いつも言ってるだろ、行かないって！ 何なんだよ毎日毎日聞いてきてさ！ 僕はもう……」

美術部を辞めた……という言葉が出そうになったのをぐっところらえた。

「……きよ、今日は行かない。うん。明日も、多分行かない」

「……分かった」

気づけば教室にいるのは、僕と香だけ。

「暁良は今日も部活に來ない。そんなこと、聞く前から分かった。暁良がずっととうとう感じていたのも、分かってた」

「なら……」

「でも来てほしかったんだよ！ 暁良が來なくなった理由は分からないよ、でも。でも、俺は今でも待ってる。暁良と放課後の美術室で、また一緒に絵を描く日をずっと待ってる。だから毎日暁良に聞いてき、もしかしたら、もしかしたら今日は部活に來るかもしれない……って」

顔を下に向ける。香の顔を見ることも、自分の顔を見せることも出来なかった。

「……ごめん、香」

「でも、理由はあるんだろ。俺には話せないのかもしれないけど」

「ごめん……」

ゆっくりと立ち上がる。香の方を見る勇氣はない。

「じゃあね香」

「うん。じゃあね」

教室を出た僕を窓の外から待っていたのは、灰色に染まる曇り空だった。

10

開始時刻より少し早く来てしまい、教室に入っても先生はまだいなかった。いつもの席に座り、カバンを横に置く。そして中から筆箱と問題集、ノートを取り出し、さつき解いた問題の答え合わせを始めた。社会科の一間一答。赤く太いマルとバツがノートに模様を作っていく。その模様が間もなく完成するということで、教室の扉が開いた。

「ごめんね暁良くん、待たせちゃって」

「ああいえ、僕が早く来ただけなんで」

「その赤鉛筆、ずっと使ってないか？」

先生が、僕の右手に収まるほどに小さい赤鉛筆を見つめる。

「新しいのを買に行く時間があまり無くて」

「そうなのかあ、赤ペンくらい後であげるよ」

「だ、大丈夫ですよ」

「失礼しますう」

突然聞こえてきた女の人の声。それも、どこか聞いたことのある声。すぐさまその方を向くと、そこに立っていたのは、

「え、な、なんで来たんですか？」

和子さんだった。

「いやあ健人が生徒と面談する姿を見られる日が来るなんてねえ。思ってもいなかったわよ」

「晧良くん。気にしないでくれ」

気にする。これは気にする。なんでこの人はまた来たのだろうか。昨年度に一回来てから、抵抗が無くなったのだろうか。

「じゃあ晧良くんはそこ座ってもらって、母さんはこっちに……」

言われるがままに着席する。僕と先生が対面し、和子さんは先生の隣。僕の母さんが来ていたら僕の隣に座ったのだろうか、今日その席が埋まることはない。

「えっとじゃあ……」

「いやちよ、ちょっとすみません先生」

早速資料を取り出そうとする先生を一旦止める。

「やっぱりこれ変っていうか。どうしても気になっちゃうんで……」

「なんかごめんなさいねー、暇だったから来ちゃって」

「あ、い、いえ」

「親戚の集まりがついこの間あってね、それで俺の母さんもまたこっちに来たんだよね」

ゴールデンウィークから一週間以上も経ったこんな時期に親戚の集まりを開いたことへの疑問は残るが、来てしまったものは仕方ないのかもしれない。

「よしじゃあ時間もないし、本題入るぞ」

「そんなに急ぐことなの？ 健人」

「この後の生徒もいるから、遅れちゃいけないんだよ」

「ああなるほど。じゃあみんなで頑張りましょう！」

「ごめんね、気にしないで」

気になるなあ。

「さて暁良くんは、目指す高校決まったかな？」

奇妙な空気感に未だ慣れない中、先生はまっすぐ視線を送りながらそう尋ねてきた。

「……いや、まだはつきりとは……」

「そうか……みどり第一高校とかはどうだ？」

まだ決まっていないことを予測していたのだろうか。先生はすぐに具体的な高校名を出してきた。

「第一高校……うーん」

みどり第一高校はこの辺りで一番賢いと言っていいほどの進学校。翔太はたしかその理数科を目指していた。

「ここから頑張れば、暁良くんなら絶対狙えると思うんだよ」

「だ、第三高校とかは……？」

「いやいや、暁良くんはもっと、第一とか目指さない」と

今のこの状況で、第一高校に合格するための十分な勉強が出来るとはとても思えない。

「高校行ってやりたいことが特にないので……」

「それは他の生徒もそんな感じだよ」

「そんなことないですよ、みんな夢をしつかり持っていますよ」

「私が高校生だった時は夢なんてあったかしらねえ」

しみじみと和子さんが天井を見上げる。その力の抜けた独り言に心を落ち着かせるほどの余裕はない。

「それなら暁良くんだって夢を持っていたじゃないか。一年生の頃から、画家になりたいて」

「ええ画家！　すごいじゃない暁良くん」

「先生、その話はもう……」

「横浜にある高校の美術科に入るって言うて……」

「先生！」

先生に向かって大声を出したのは初めてかもしれない。

「もうその夢は、諦めたんです」

——僕が中学二年生だった、去年の夏。父さんは突然として、この世を去った。

「暁良さん、急いで荷物整えて。お母さんが迎えに来るそうだから」

何でもない休日の、何でもない部活の時間だった。

「なんだ？ 急に」

「予定でも入ったのかな。ほら、こないだもそうだったじゃん」

「あー、あったな。まあいいや、パレット俺が洗ってあげるよ」

「悪いな、ありがとう」

香といつも通りの挨拶を交わし、僕は駐車場で母さんの車を待った。思えばこれが、僕にとって最後の部活動だった。

病名は覚えていない。心臓がどうのこうの……みたいなものだった気がする。元々体が弱い父さんだったが、これほど急に職場で倒れてしまうとは母さんも思っていない。良かったらしい。

「ねえお母さーん！ 送ってよおー！」

「ごめんね拓実。お母さん仕事で、これからは朝早く出発しなきゃいけないの」

「ええーなんでえー」

「ごめんね、傘ここにたくさんあるから。気をつけて行ってね。暁良も気をつけて……」

慌ただしく母さんが扉を開けると、どしや降りの雨音が途端に大きくなつて僕の部屋まで響いてきた。雨の中歩きたくない、と廊下で騒ぐ弟の声がそれに重なる。僕は机の上にあった画材セットを床に叩きつけた。様々な色のペン、鉛筆、絵の具。それは小学校の卒業祝いに父さんが買ってくれたもの。そして、僕が絵を描く時にいつも使っていたものだった――

「もう三年生になったんだしさ」

「……………」

「しっかり目指すならお母さんだつて……………」

「目指したくても目指せないんだよ！」

我慢できず一人、部屋の中で床に向かって叫んだ。

「父さんがいなくなつて、母さんはずっと一人で弟の面倒見ながら家事やって、それ以外の時間は外で働いて、そんなの目の前にして、のんきに絵が描けるわけないだろ！」

ケースから中身までバキバキになった画材セットを捨てるよう母さんに頼んだあの日、僕は絵を描くことをやめた。

「今まで絵しか描いてこなかった奴が一年以上絵を描かず、それでおいで高校に行つて美術学ぶために今は勉強？　するわけないだろ、出来るわけないだろこんな状況で！」

元は父さんが趣味でスケッチをしていたのを隣で真似していたのが始まりだった。絵を描くために外へ出かけるときはいつも父さんと二人。仕事帰りに額縁を大量に買ってきては、僕の絵を家中に飾っていた。

しかし、そんな父さんと過ごす日々はもう訪れない。嫌な過去はすぐに忘れる――父さんを忘れるには、絵を描くことを捨てるしかなかった。友達の誰にも父さんの死を伝えなかったのもそういう理由からだ。

「今やるのが、見つからないんだよ……」

姿は見えない。でも母さんが今、ただ静かに口を閉じていることは分かる。止まらない胸の締め付けを抑えようと、静かに目を閉じた。暗闇の中で一つ深呼吸をしてから目を開け、ヘッドホンを両耳に装着する。パソコンの暗い画面に反射して見える壁に掛かった僕の絵が、画面が水色になると同時に姿を消した。

12

「……先生、進路のことはまた今度でもいいですか」

長い沈黙に耐えきれず、僕はそう先生に提案した。この場で先生に思いの丈をぶつけたところで自分の心が晴れるわけではない。そもそも、これがしたいあれがしたいといった感情だけで僕の進路は決まらないのだ。それは先生だって知っているはずだ。

「……来週までには決めておけよ」

それが百万歩譲っての言葉であることは、僕も承知している。

「せ、せつかくなんで、先生のお母さんの話を聞きたい……です」

必死に話を变えようとする僕を見て、和子さんは険しかった表情をゆるめた。

「いいのよ、気を遣わなくて」

「母さんからの話は、この前散々聞いたんじゃないのか」

「いやいや、僕聞いてないですよ。そもそも何であの参観日に和子さんが来たのかも
いまいち分かってないですし」

「いやあね、健人ってまだ若いでしょう？ 生徒に暴力振るうとかしてないかなあつて心配で」

「ちよつと母さん、今はそんな時代じゃないよ」

浅田先生もツツコミを入れながら、段々と顔の緊張がほぐれていくようだった。僕の好きな浅田先生は、この浅田先生だ。

「先生むちやくちや優しいですから。暴力なんてとんでもないですよ」

「それだったらいいんだけどねえ、いや健人はね、昔からずっと先生になりたいって
言っていたのよ」

「ちよつともういいってそういう話は」

先生は照れながら、左手を机について顔を横にした。先生のそういう話は聞いたこ

とがない。僕はわざと興味津々な顔を和子さんに見せた。

「健人のお父さんも先生やっていてね」

「あ、それは前に聞いたことがあります」

「なんだって？」

「クラスの女子たちが話していましたよ」

「全く……」

あきれる先生を横目に、和子さんは話を続ける。

「お父さんはよく健人にも勉強を教えていた。それで健人は小さい時からずっと先生になる先生になるーって言って」

「まあたしかに親父はカッコ良かったけどな」

「へえ。でも僕も、父さんに勉強教えてもらうのとか憧れますね」

さらっとそう口にしたとき、何か違和感を覚えた。憧れる……？ 憧れているのか、僕は？ 僕だって、父さんに絵の描き方を教えてもらった。浅田先生と同じだ。小さな頃から画家になる、画家になる……と。そうだ。憧れなんかじゃない。僕も、先生と同じ過去を歩んできたんだ。

「それで高三の時かしらね。進路決めるっていう話になって、当然健人は先生になるため大学に行きたいって言いだして」

「父さんが行っていたのと同じ大学でな。東京にあったんだけど」

先生が東京の大学に通っていた話は聞いたことがある。僕はあまり詳しくないので分からなかったが、友達曰くかなり有名な私立大学らしい。

「その当時、うちの家庭は今よりも貧乏で。でも健人が先生なりたいて言うからね、私も父さんとは別に働き始めて」

「えっ、新しくですか？」

「それまでは家事やりながら少しだけ内職でお金貰っていたんだけどね。外に出て働いたのはほぼ初めてだったかしら」

たしかに私立大学となればお金はかかるだろうけど……。

「俺が家庭の事情とか分かっていたらな、あそこまで頼み込まなかったんだけど」

家庭の事情、か……。

「でも健人が先生になりたいのはずっと私も知っていたし、だから毎年少しづつお金は貯めていたのよ」

「あ、そうだったの？」

「働き場所がすぐ見つかったのはただ運が良かっただけね。でもそうでなかったとしても、親としてやれることは最大限やろうとは思っていたよ」

頭の中に浮かぶのは、家事をしながらも全力で拓実の世話をする母さんの姿。僕に進路を尋ねてくる母さんの不安げな声。

「私にとって、健人がやりたいことをやっている姿を見ることが一番の幸せだったのよ。だから健人が好きなことをやってるんなら、私は全力でそれを応援する。晁良くんのお母さんもそう思っているはずよ」

「……晁良くん。俺が夢を叶えられたのは、両親のおかげ、そして、俺がとにかく夢を追いかけたおかげだった……みたいだよ」

今日の前にいる二人が一瞬、自分とお母さんに見えた、そんな気がした。

13

翔太はまた図書館で勉強しながら、僕の面談が終わるのを待っていてくれた。元気

のいい太陽の光が川に反射して、線香花火のようにパチパチと輝いている。ここ何日か続いていた雨が嘘みたいだ。温かく柔らかな風を全身で受け止める。

「なあ翔太。翔太は、進路どうするの」

「え？」

昨日あれほど嫌がっていた進路の話を僕から持ち出したのだから、翔太が驚くのも当たり前だった。

「いやその、どれくらい定まっているのかなあって」

「あ、今日面談で何かあったんだ」

「いや、そういうわけじゃないんだけどさ」

「俺は第一指すよ」

翔太は笑みを浮かべながら強く言い放った。

「第一高校の理数科行って、医者目指す」

中一の頃に聞いたそれと、全く同じだ。

「やっぱそうなんだな。まあそうか、それでこんなに勉強してるもんな」

「でもねー、まだこのままじゃダメなんだよね」

翔太が少しずつ僕から視線をそらす。

「塾行きたいってずっと親に言ってるんだけど、全然聞いてくれなくて」

「え、そうなの。翔太は塾行かずに自分で勉強したいんだと勝手に思ってた」

「さすがに自分では無理だよ。学校の授業でもなかなかハイレベルなことはやらないし」

そうなのか。翔太ほどの優秀さでもまだ足りないのか。

「てか暁良は結局どうするんだよ。面談で話したんでしょ？」

「ま、まだ決めてはないんだけどね。面談って言っても親は来なかったし」

先生の親は来たけど。

「でも進路の相談には乗ってくれるだろ？」

「え、母さんが？ いやまあ、どうするのって心配はしてくれただけど」

「俺の母さんとか、本当に興味持っていないよ。面談に来て、翔太の好きなように、としか言わないし」

「いいじゃん」

「違うんだよ、面倒だからそう答えてるだけ。だから塾行かせてくれって言っても無

視するわけ。興味がないから」

なるほどお。なんか想像していたのと違う。

「いいなあ。面談なんて来なくてもいいから、興味持ってもらえる親が欲しかったよ」
見たことのない表情を浮かべながら翔太が蹴った石ころは、小さく音を立てながら
茂みの中に消えていった。

14

「母さん、今日はありがとう」

「え、今の子で終わりがいい。もっと色んな子と話したかったなあ」

廊下は静寂に包まれ、教室の中には隣り合って座る健人と和子の姿があった。

「母さん色々喋りすぎだって。今日はただ隣にいただけでいいって言ったじゃん」

面談の予定が決まり、健人は自分の母にもう一度中学校へ来てもらうことを考えた。

しかしその理由は言いたくなかったため、和子を呼ぶにはまた別の理由が必要であった。それで、親戚をまた自分の家に集めたのだ。

「あの子がすごい聞きたそうな顔するんだもの」

「進路の話よりはマシだったんだろ。まあでもあれはあれで、暁良くんにとっては良かったんじゃないかな」

「進路、決まるかしらね」

「あとは暁良くん次第かな」

健人はそう言うのと、小さく笑みを浮かべながらゆっくりと席を立った。机の上に置かれた荷物を、和子が健人に向けて差し出す。

「母さんほんとありがたいがとうな。母さんの話を聞いて、俺もやるべきことが分かった気がするよ」

「あら、私もよ。自分で過去のこと話してたら、思いついちゃった」

「なんだよそれ」

二人は椅子と机を元の位置に戻し、そのまま教室の電気を消した。昇降口に向かって廊下を歩きながら、和子が健人に尋ねる。

「そういえば健人。健人がとりあえず来てくれて言うから私ついてきたけど、なんで今日私を呼んだの？」

「ああ、それは……」

健人は足を止め、和子に顔を向けた。

「晁良くんとしっかり『三者面談』がしたかったから」

15

「ただいまー」

「おかえりいーっ！」

珍しく、拓実の張り切ったおかえりだけが玄関には届いてきた。

「ずっとお兄ちゃんのこと待ってたんだよ、晩ご飯の温め方分かんなくて」

「え？ 母さんは？」

「なんか急に予定入ったんだって。仕事かな」

「仕事か……」

「だから先食べといてだって」

そうか……今日はまだ話せない……かな。

「もしお兄ちゃんも後で食べるなら、俺の分だけでも温めてくれたら……」

「ああいや、僕も食べるよ。ちよつと待ってて」

急ぎ足で部屋に入ってカバンを置く。そして壁に掛けてある自分の絵を何となく見て……なんだ、この絵は。僕が昔描いた絵の隣に、同じ額縁に入った絵が並んでいる。様々な色が入り乱れた騒がしい背景。しかしその中に一つ、それもど真ん中ではなく少し右に寄った位置に、太いもみじの木が赤く輝いていた。輪郭ははっきりしていないが、色とりどりの点が集まり、ぶわつとその一本の木がはきはきと浮かび上がってくる。

「……僕の絵にそっくりだ」

ずいぶん前に母さんが言っていた絵。拓実が描いた秋の風景画とは、このことだった。なんでこんなに経ってから……いや、もしかしたら、もう何日も前からこの絵は飾ってあったのかもしれない。僕がただこの壁に目をやらなかっただけで、本当はもつと前から僕たちの部屋に……。

「お兄ちゃん早くー！」

仮にそうだったとして、今日という日にようやくこの絵に気付けた理由を、僕は知

っている。僕が何日かぶり、いや、何か月かぶりに、自分の絵と向き合おうと思えたからだ。

「今行くよー」

本当は今晚、母さんに伝えようと思っていた。でも別に、今日じゃなくてもいい。明日になっても、いつまでも、この想いは消えない、そんな自信があるからだ。

16

その人は僕が教室のドアを開けた瞬間、視界に入ってきた。

「和子さん！」

「暁良くん！ 昨日はどうもお邪魔しましたー」

ガラガラガラガラ

「いやあなんか雨降りそうだな……っておい！ 母さん！」

浅田先生は前を向いて和子さんに気づくやいなや、かつて聞いたことのないほどの大声を出して驚いた。

「今日は公園行ってくるって朝言ってたじゃんか」

「だって学校に行くって正直に言うのと、健人絶対反対するじゃないの。ねえー？」

周りの女子生徒と顔を合わせながらそう楽しそうに語る和子さんを見て、先生は分
かりやすいため息をついた。

「私だってやりたいことをやるわよ。年齢なんて関係ないものね？」

和子さんが僕に向けてそう微笑みかける。その表情は、今までで一番明るかったよ
うな気がした。

今日はやけに早く時間が過ぎていった気がする。ずっと放課後のことを考えていた
からだろうか。

「じゃあ今日も、面談あってしばらく待つ人は、部活に行くか自習室にいるかなどし
て待っていてくださいね」

部活のみんなはどう思うだろう。というか、一年生に関しては僕のことを知らない
人がほとんどじゃないのか。

「和子さんは明日も来るんですかあー？」

「明日も来ますよお。実家にはまだ帰らないので」

「おおおおー」

「ちよ母さん、もう……まあいいやはいい日直お願いー」

「起立」

顧問の先生はどんな顔するだろうか。退部した生徒が一年ぶりに戻ってくるなんて思ってもいないだろう。

「さようならー」

いや。きつと大丈夫だ。僕は一人じゃない。

「晁良ー。……今日は、部活来るか？」

その言葉を、待っていた。

「香。行くよ」

「え？」

「部活行く。……昨日は、ごめん」

「……そうか。……毎日聞き続けて良かった」

僕は、やりたいことを、やるんだ。

「……なんか、緊張するな」

「なんでだよ。まだ早いからそんなに部員来てないし」

普段の授業はもちろんこの美術室で行われるし、昨日だってここに来たはずなのに、どうも今はそれもは違う部屋に思えてくる。

「花芽（かが）先生はいないかな？」

「まだこの時間は学年室にいるよ。って暁良、顧問に会うのも恥ずかしいのかよ」

花芽先生。若い女性の先生で、一年生からずっと美術科の先生としてお世話になっている。

「いやもう、なんせ久しぶりに来たわけだから……」

「いいよもう、早く行くぞ」

まあたしかに、ここであたふたしていてもそれはそれで恥ずかしい。僕は香に続いて美術室へ足を踏み入れた。

ガラガラガラ

「あ、こんにちは」

「こんにちはー香くん」

あ。

「おーっと、暁良くんじゃないのー！」

そこには、普通に花芽先生がいた。というか、花芽先生しかいなかった。

「……ど、どうも」

とつさの事態に戸惑いを隠せぬまま香の方を見ると、香は何だか申し訳なさそうに渋い表情をした。

「君たち二人が並んでいるの久しぶりに見たわよ」

「暁良、今日から学校での活動、再開するそうです」

「お、そうなの。いやあ私ね、ずっと待ってたのよ暁良くんのこと」

そう言いながら隣の美術研究室に入って行った花芽先生は、やがて一枚のキャンパスを手にして戻ってきた。

「はい、これ」

「えっ、これ……」

目の前にあるそのキャンパスを見つめる。点で描かれた山々を背にして、桜の木と

人間が描かれている。まだ鉛筆での下書きが残っており、塗られていない部分も多い。

「まだ完成してないでしょう、この作品」

これは、僕が二年生の時に完成させるつもりだった作品だ。授業ではなく、部活として制作していたもの。そして桜の木の下に描かれているのは、僕と、拓実と、母さんと……全力で笑っている、父さんだった。去年の春だ。家族四人で行ったお花見の時だ。その時撮った写真を、水彩画にしようと思ったんだ。

「……取っておいてくれたんですね」

ぶわあつと顔全体が熱くなるのを感じ、思わず僕は顔を下に向けた。

「当然じゃないの」

「もう、引退したのに……」

「……ん？ い、引退？ お前、美術部辞めたのか？」

「ああそうか……ごめん香。ずっと隠してて」

「引退なんかしてないでしょ」

「……え？」

両目を手で拭いながら先生の方を見る。

「去年の夏、暁良くんが美術部辞めるって私のところに言いに来て、私は、じゃあ退部届けをまた今度持つて来てね、って言ったじゃないの。でも暁良くん、まだ私に渡してないでしょ？」

「え、出し忘れてたってこと？」

「……たしかに、出してないかも」

「じゃあまだ美術部辞めてないんだな！ よし！ そうだな、お前ずっと美術部だったんだな！ 毎日誘ってた俺は、間違ってたなかつたんだな！」

僕の肩を何度も叩きながら自分に言い聞かせるようにそう言う香は、今にも泣き出しそうに声を震わせていた。

「……そっか。退部届け、出し忘れてたのか」

そう呟きながらも僕は何となく、それがただの出し忘れてではなかったような気もしていた。あの日、父さんがこの世を去って、夢も筆も絵の具も全て捨てた僕は、それでもいつかここに戻ってくることを、心のどこかで望んでいたのかもしれない。

「……よっしゃ暁良！ 描くぞ！」

「……よし！」

香と同じタイミングで、机の横にカバンを下ろす。一年前まで部活の時にいつも決まって座っていたこの席を、僕の身体が忘れているはずはなかった。

17

「では三者面談を始めます、よろしくお願ひします」

「お願ひしまーす」

かしこまった俺の挨拶に、翔太くんも姿勢を正して返事をした。彼の隣には退屈そうに周りを見渡す母親が座っている。

「では早速翔太くんの進路についてなんですが、みどり第一高校の理数科を目指す、ということでしょうか？」

「……………あ、はい」

一瞬親の方を見て、話し始めそうにないのを察した翔太くんが慌ててそう返事をした。しかしここは母親にも聞くしかない。

「えっと、お母さんは？」

「私、翔太の進路は全部翔太に任せているので。彼がそう言うなら、それでいいです」
淡々と述べながらも、真つ直ぐな視線をこちらに送ってくる。そのような答えが返ってくることはこれまでの面談からも予想はついていた。だから昨日、俺はこれと言おうと決めたんだ。

「あの一、お母さん。もう少し、翔太くんのことを考えてくれませんか」
「ちよ、先生」

翔太くんが静かに呼び止めてきたが、やめるわけにはいかなかった。

「翔太くん、塾に行きたいとずっと言ってきました。将来医者を目指すためには、もっと高いレベルの勉強が必要だと」

「浅田先生。先生は前回言いましたよね？ これほどの成績なら塾には行かなくても十分だと」

「言いました。あの時わたしは、ただ勉強ができればいい、ただ高校に受かればいいと思っていたからです。でも、今は違います。昨日わたしはある生徒に言いました。やりたいことをやればいい、と」

昨日の放課後を思い出す。なんだか俺の横に母さんが、今もいるような気がした。

「翔太くんは、勉強がしたいんです。勉強が、彼のやりたいことなんです」

俺はなりたかった先生になることができた。俺がただ必死に先生を目指したから。そして、

「塾行く行かないは自由です。もちろんお金もかかりますし、簡単に行かせられるものではないです。でもお母さん」

親が、それを支えてくれたから。

「翔太くんのやりたいことを、全力で応援してくれませんか」

今の俺がやるべきことは、これだろう。

18

アパートの階段を二階まで駆け上る。玄関前の薄明るい廊下を前へ前へと歩き、軽い鉄の扉を開けた。

「だいま」

「おかえり、暁良。もうご飯できてるからね。母さんと拓実は今から食べるけど、暁

良がもし後で食べるなら……」

「いや、僕も食べる」

カバンを静かに置いて置いて食卓に向かう。少しだけ家の中が煙たいのは、今日の晩御飯がオムライスだからだ。出来たてを食べるのは久しぶりだといっても、それくらいは分かっている。

「いただきます」

四角い木の机。僕の左隣には母さんがいて、向かいには拓実が座る。拓実の隣にある四つめの椅子も、まだそこには残っている。僕は薄く焦げついた卵を一口食べると箸を置いた。

「母さん、僕……」

前置きなんてものはいらない。一秒でも早く、このことを伝えようと思った。

「僕、横浜の美術科目指すから。勉強する。絵の練習もする。それで高校行っても、絵を描くから」

昨日話したはずの拓実は、わざとらしく驚いた表情を見せている。母さんは目を潤ませながらも、優しく僕に微笑みかけてきた。そして、

「……よかった」

とだけ、小さく口にした。

お風呂から上がり、髪を乾かしながらも僕は、それを拓実に見尋ねずにはいられなかった。

「あのー、なんで急に勉強してんの。拓実がその机に座ってるのほぼ見たことなかったんだけど」

「別に。宿題あるからやってるだけだよ、お兄ちゃんと一緒」

「ふーん」

軽く返事をしつつドライヤーを片付け、僕も改めて机に向かった。横にある棚の上には、畳まれたノートパソコンがひっそりと置かれている。

ガチャ

「暁良ー」

突然部屋に入ってきた母さんに目をやると、母さんは両手で何かを握りしめていた。

アルミで作られた、銀色の四角いケース。

「それ……」

「色鉛筆。昔父さんが暁良にくれたでしょ」

その色鉛筆は、かつての誕生日プレゼントに僕がもらった画材セットの中の一つ。そして、去年の夏、僕が母さんに捨ててくれ、と頼んだもの。

「捨ててなかったの」

「……捨てたくなかったのよ、暁良の大切なものを」

手で触れたそのケースは、あの頃よりもずっとデコボコで、傷だらけだった。力を込めてその開けにくいケースを開ける。バラバラの長さをした色鉛筆が、数本は逆さまになりながらそこに並んでいた。

「あれ？」

いつの間にそれをのぞいていた拓実が、何か異変を感じたようだ。

「一本足りないよ？」

「本当だ」

言われるのとはぼ同時に僕も、一番左端に一本分のスペース空いていることに気が付いた。何色が無いのか、右端から順に眺めていく。青、茶、黒、緑……

「え、もしかして」

僕はすぐさま、目の前にある筆箱の中をあさり始めた。

「……これか……これか……」

太さも形もデザインもそこにあるものと同じ。そしてただ一つ違うその色は、鮮やかな赤色だった。

「思い出した……」

「晧良、とにかくその色鉛筆気に入ってたからねー」

この色鉛筆を買ってもらった次の日から、僕はそのうち赤だけを学校に持っていき始めた。他の色はあまり使う機会がないが、赤色は答え合わせに使えると思ったからだ。それからずっと僕は、この赤鉛筆を筆箱に入れ続けてきた。これが父さんからもらったものの一部だということも忘れて。

「他にもあったでしょ、筆とか、絵の具とか。それも全部取ってあるからね」

去年の夏。あの日僕は、全てを捨て、忘れようとした。父さんのことも、美術部のことも、画家を目指すことも。でも捨ててなんかいなかった。父さんはずっと、僕のそばにいたんだ――

——暁良がゆつくりと、赤色をケースの中に戻す。並ぶ様々な色へと向かって静かに落ちた涙は、まるで絵の具を溶かすかのように広がった。

「……暁良、頑張ろう」

母はそう彼に言った。

「……がんばれっ」

拓実も照れながらそう口にした。

「……うん」

壁に掛かっているのは、拓実が描いた秋の風景画。そしてその隣には、暁良が三年前に描いた、海を背に立つ家族四人の絵。

自分の家族を描くことが、暁良にとって一番の幸せだった。そしてそれは今も、変わらない。

小さなひとつの部屋という名のパレットに並んだ、赤、青、黄色。三人、いや、三色が描いたその空間は、それはそれは、美しかった。

了